



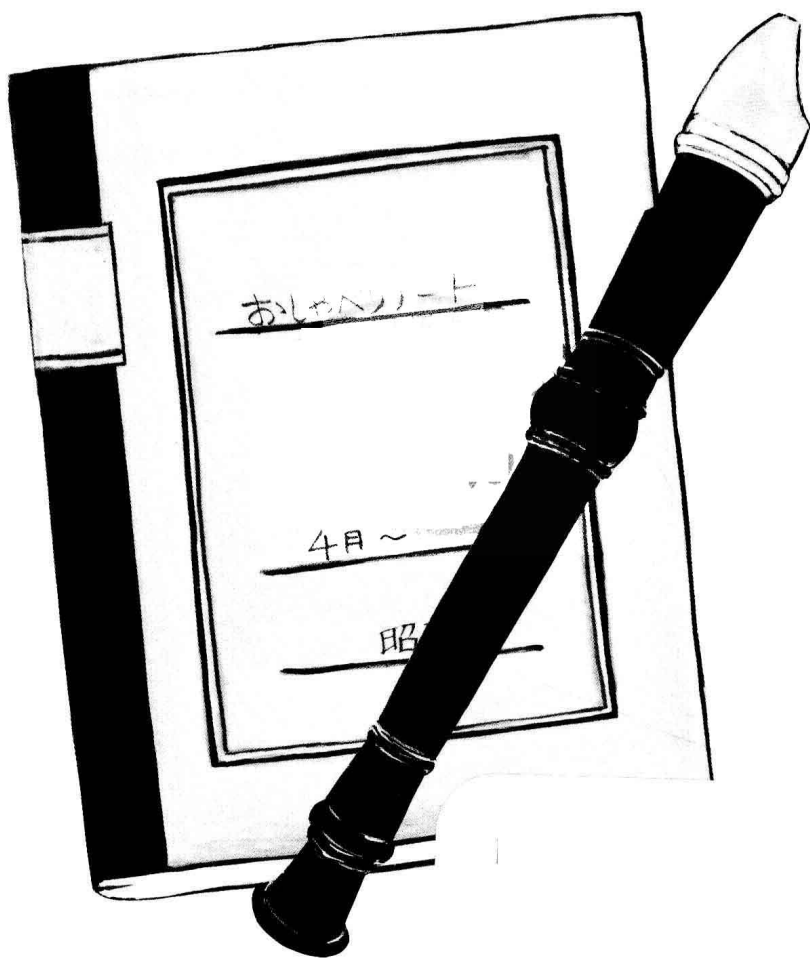
先生のたなこに なりたい日

宮川ひろ／作
長谷川知子／絵

たなこになりたい日

宮川ひろ／作

長谷川知子／絵



たなこになりたい日

宮川ひろ／作

長谷川知子／絵



銀河社

1

「このせつの子どももしゅうは、お・お・や・も・た・な・こも知らないってんだから、はなしはやりにくくなったものです。

お長屋^{ながや}なんていうのもなくなりましたが、アパートならしっていなさるだろう。アパートをもっている人^{ひと}がお・お・や。そのアパートをかりて家賃^{やちん}をはらっていなさるのがた・な・こっていうことになりましたようかなつ」

三年三組の教室^{きょうしつ}では いまこんな落語^{らくご}ごっこがはやっている。山口知子^{やまぐちともこ}先生が語^{かた}ってくれた落語^{らくご}が気^きにいったからだ。





新しくうけもちになった山口知子先生は、よその学校からうつってきたばかりだが、だいぶかわっているようだ。

はじめて教室へはいつてきたときの、かつこうがおかしかった。大きなふろしきづつみをしよいこんで、よっころしよとばかりはいつてきた。それはしたきりすずめのよくばりばあさんそっくりだったから、みんなおどろいたりよろこんだりだった。といっても、山口先生はまだ三十さいぐらいの、若いきれいな先生である。

「このふろしきの中には、何がはいつていると思う？」

山口先生は、にこにこときいた。

「おぼけ」 「へび」 「あ、とりかごかな」 「いいもの」

みんなかつてなことをいった。山口先生は、だまってふろしきづつみをほどこいてゆく。中からでてきたのは、大きなダンボールだった。

「みんなよく忘れものをするでしょう。そんなときかしてあげるものが、みんなはいつているのよ」

先生は箱はこのふたをあけると、中のものをつぎつぎととりだして、机つくえの上にならべていった。

たてぶえ、えのぐ、ものさし、教科書きょうかしょ、えんぴつからノートまで、十人分じゅうにんぶんぐらいもそろっていた。

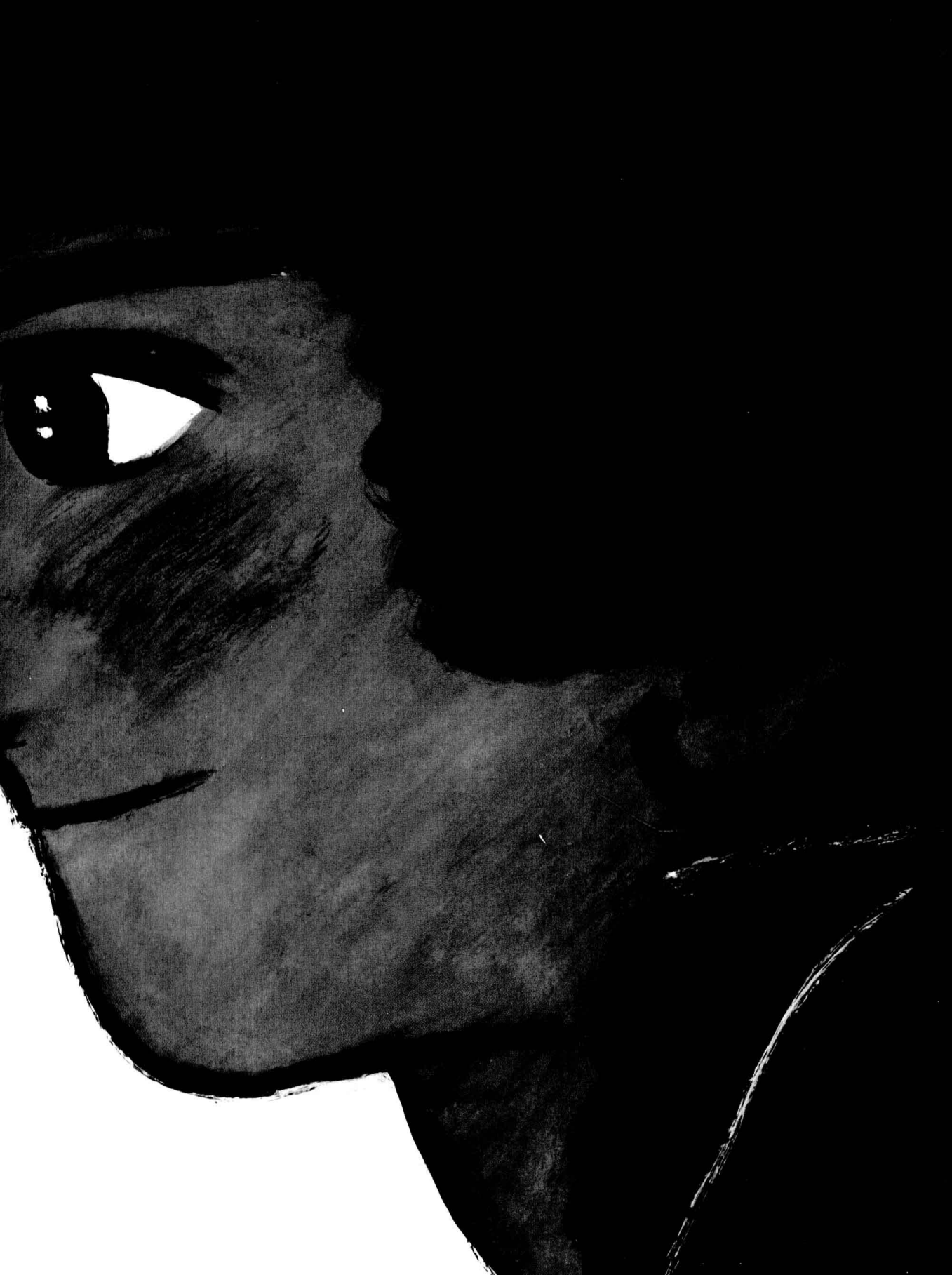
「安心あんしんして忘れわすなさい。そのかわり、忘れわすものをしてたら先生のた・な・こになってもらいます。おおやとたなこのように、なかよくやっていきましょう。たなこにはまあ何かと手伝てつだってもらったり、肩かたでもたたいてもらいます。でもね、先生にほめられたり、友だちにありがとうといわれるようなことをしたら、長屋ながやから出してあげます。この先生、めったなことではほめませんけどね」

山口先生は、にやつとわらってみせた。

「た・な・こってなんですか」

昭平しょうへいがきいた。

そこで先生は、おおやとたなこのでてくる落語らくごを、おもしろく語かたってくれたのである。





「教科書、うちで読んでみたひと」

先生は新しい本のおいをすいこんでからきいた。

「はい」

たくさん手があがった。そんな中で昭平一人があわてていた。三年生になって、はじめての国語の授業がはじまるというのに、いくらさがしても教科書がみつからない。

「忘れてきたのかよ」

うしろの席から伸一がつつつく。

「きのう、うちへ帰るとすぐ、時間割りをあわせたんだよ。ほんとだよ」

そういいながらも、昭平は机の中のものをみんなひっぱりだして、一冊づつしらべてみた。やっぱりない。

「先生、昭平が国語の本忘れたんだって」

早くも伸一が、うれしそうにつげぐちをした。

「た・な・こ第一号だね」

「おもしれえ。ぼくもなってみてえな」

教室中きょうしつちゆうがにぎやかになった。

「よしよし、たなこにおなり、おおやとたなこは親子おやこもどうぞん、えんりよはいらないよ」

山口先生はそんなことをいうと、昭平に教科書きょうかしょをかしてくれて、そのまま授じゆ業ぎようをすすめていった。

二十分にじゅうぶん休みやすみになった。みんなが外そとへ出でていくと、教室にはおおやとたなこだけが残のこされた。

「どれ、肩かたでもたたいてもらおうかね」

山口先生はまだ三十さいぐらいの若い先生わかなのに、としよりのようなかっつうをして、いすにこしかけるとむこうをむいた。

昭平はたなこになんかされて、くやしかったりはずかしかったりで、こぶしをにぎると力ちからいっぱいたたいてやった。



